

2016.08.02 インタビュー記事

社会福祉法人あおぞら保育園 元井由隆園長先生

ライター：キャリア・맘 秋山祐子

<テーマ>

信頼・つながり・可能性！『あおぞら保育園』のチャレンジ

2006年4月、多摩センターに開園した『あおぞら保育園』。京王・小田急多摩センター駅から徒歩2分と駅から近く便利な立地にあります。

開園から10年、保護者のみなさま地域のみなさまとともに試行錯誤しながら新しい概念を持つ保育園を創ってきました。そんな『あおぞら保育園』の理念と取り組みをご紹介します。

■あおぞら保育園が大切にしていること

－ あおぞら保育園の保育者が心がけていることを教えてください。

赤ちゃんから6歳までの幼児期の子どもが生活を通して成長する場所が保育園です。子ども達の成長を大人が力を合わせて支えています。

大人が子どもに接するとき、つい自分の過去や普通を押し付けてしまうことがあります。「自分はこうやって注意をされた」「こんなことを親から言われた」、誰もが成長過程で経験があることです。もし、保育者が自分の過去の経験だけを頼りに個人的な感情に流されて接すると子ども達はどうなるでしょうか。保育者によって言葉や行動、注意の仕方などに違いが出て子ども達は混乱してしまいます。保育者の違いに応じられず、怒られることもあるでしょう。そんな大人の無意識が、子ども達の心を傷つけてしまうこともあり得るのです。

そこで、あおぞら保育園では保育者の主観的な保育現場にしないために、保育者も子ども達とともに成長していくための取り組みを行っています。

－ では、保育の現場で大切にしている取り組みを具体的にうかがいます。

保育の現場を客観視できるよう、根拠を基に考えられる仕組みを作ることを第1に取り組んでいます。乳幼児の心理学、発達心理学、脳科学などの学問知識をもとに理論的に保育や子どもについて語ることをしています。「子ども都合」なのか「大人都合」なのか、自分たちの行動を言葉で整理し、共通の理解を深めるためです。客観的かつ学問的な判断基準を持つことで、成長期に合わせた環境作りと教育が可能になります。クラ

すが変わり担任の先生が変わると不安になる子どももいます。ですが、客観的かつ学問的な判断基準を持つ保育者がチームとなってクラスを作るあおぞら保育園では、子ども達は不安を感じることなく次のステージに向かっていきやすくなります。

その上で、ベテラン保育者の経験則というものが意味を持つことになります。学問的な裏付けにより保育者の経験が収束され、経験が「普通」という言葉で語られやすくなるのです。

学問と経験、どちらかの視点に偏っても保育の現場はバランスを崩します。理屈だけでも経験だけでも、めまぐるしく変わる子ども達の成長についていくことはできないのです。そして、2つのどちらの視点からでも「根拠」「理由」を常に考えることが重要です。子どもの行動や言葉の一つ一つには意味があって理由があります。その理由を探ることで、子どもにとって最適な環境や対応を作ることが可能になるのです。

-具体的な対応例を教えてください。

1歳児クラスから、友達のおもちゃを取るトラブルが多いと報告がありました。発達上の視点から理由を探ると、1歳児は「わたし」「あなた」という自己と他者の認識が形成される前段階なので、「私のもの」「あなたのもの」という概念が理解できない月齢と考えられます。そのため、「だめでしょ!」と叱ることに意味ははたしてあるのでしょうか? この学問的な裏付けをもとにトラブルを回避するための環境を探ります。子どもと先生が1対1でコミュニケーションがとれる配置を作り、目の前の先生と自分のおもちゃに気持ちが向かうように促す導線を作りこみます。そうすると、無駄に叱ったり注意したりすることがなくなり、子どもから目を合わせて大人と関わりを持とうとする行動が増えます。そうすることで大人にも余裕ができるのです。

「なんでそうなるんだろう」「どうしてだろう」と常に根拠を考え、言葉にして整理することで、保育の質が向上していきます。

■あおぞら保育園の子ども達を育てること

-子どもには心と身体の両方の成長の場が必要です。

1歳半過ぎの子どもは、イタズラや言葉の理解が増える時期なので手で触れたり自由にモノを選べる刺激的な環境が必要になります。子ども達が伸び伸びと育つためには、日々の暮らしの中で自然に遊びを選択できる自由な空間とその遊びを最後まで見守ってくれる大人の存在がとても必要です。また、喜怒哀楽をしっかりと感じとり、言葉で気持ちをくみ取ってくれる大人の存在があることで子どもが精神的に満たされ、豊かな情感を育んでいきます。そういったことを積み重ね、楽しむこと、我慢することを身体で覚え、発散・抑制のコントロールを子ども自身ができるようになっていきます。日常環境の中に場面を作り、任せること、褒めることをバランスよく取り入れます。そして、

同じことを何回も繰り返すことで脳神経をつなげて活発化させていきます。小さなプロセスが発達の過程を支えていくのです。

-保育園時代をどう過ごすかで未来が変わりますか？

だいたい6歳までに人間関係や折り合いのつけ方などのベースができる子どもが多いです。保育園でクリアしている子どもは、バランス力もあり小学校にあがってもリーダーシップをとれるでしょう。保育園で「楽しい」と感じながら物事に取り組める子どもは、この先どこにいても自分で目標設定できるようになります。「楽しい」と言っても、ワイワイ騒ぐことだけではありません。自分で決めて取り組んだ小さなことが1つできた、次もできた、と繋がるのが充実した時間になり、楽しいと感じることになります。子どもには褒められたい、認められたいという気持ちが必ずあります。きちんと認めて評価して褒めることで子どもは自信をつけることができます。幼少期の自信は成長の土台となり、大人社会と信頼関係を築く一歩に繋がります。

■地域社会に向けて発信したいこと

-保育園が担う役割について考えをうかがいます。

親にとっても子どもにとっても、『あおぞら保育園』が信頼できる場所であり存在になることを目指しています。困ったときに地域の中に相談できる場所があるかないかでは、心のゆとりが全く変わってきます。また、子育てという同じ体験を通して出会った保育園の保護者の繋がりはとても強いものです。保護者と保育園、それを取り巻く周りのさまざまな繋がりが地域の核となり、子どもを取り巻く環境の柱になり得ると考えています。

そのためには、保育園単独ではなく地域の幼稚園、小学校と連携が必要です。保・幼・小が連携し、島田療育センターのお力も借り立場が違っても同じ言葉で保育・教育を考える研修などが進んでいます。垣根を超えた交流が卒園後の子どもにとってプラスになることを、目的としています。

最後に園長先生からこんな言葉がありました。ひとつひとつ意味があって、どうとらえるかを考えるのが保育の仕事であり、子どもを通して共有できる環境を持っているのが保育園の強みです。保育園の取り組みを知ることで、夫婦や家族が関わり変わっていく可能性も持っています。そんな素敵なものを地域の柱にしないほうがもったいないでしょう。

言葉の力を信じる園長先生の思いの強さが、保育園の未来を切り開く原動力になっていることを感じたインタビューでした。